

サンプル版  
編集版  
堅貞 爆ぜる

作者：金目

## 目次

製品版概要.....	2
第1話.....	3
後日談 堅太郎、裸針盤として男を導く より抜粋 .....	8
奥付 .....	13

## 製品版概要

登場人物紹介

第1話から第24話(支援サイトからの再録)

後日談 堅太郎、裸針盤として男を導く(書き下ろし)

全編、ほぼすべてが野外露出と絶頂で、そのほかにオナニーとザーメンぶっかけが少々含まれます。

このサンプル版では、再録をした第1話と、書き下ろしの「後日談 堅太郎、裸針盤として男を導く」の前半を掲載しています。

### 【お願い】

この小説は金目によるフィクションであり、現実が存在する個人・団体などとは無関係です。

無断転載・私的利用の範囲を超えた共有などの著作権法に触れる行為、なりすまし・模倣を目的としたAI・機械学習への利用などは控えていただきますようお願いします。

この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。

作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いします。

## 第1話

天気予報通りの夜半の大雨の中、太剛持堅太郎（だいごうじ けんたろう）はふらふらと歩いていた。

大手健康食品メーカーである美悠好（びゆうこう）に所属する空手選手が、雨に降られながら歩いている様子は、幽鬼のようであった。

大柄な肉体とがっしりとした筋肉は、濡れた服の上からでも、その屈強さを示している。だが、呆然とした顔は、空手選手、いや、人生への一切の希望を失った有様でしかない。堅太郎自身、どうして、こんなことになったのかは分からない。きっかけは、そう、30分ほど前のことだ。

「向かい、いいですか？」

「ああ」

馴染みの居酒屋の隅のテーブルで、喧噪を聞き流しながら焼き鳥をつまみに日本酒を飲んでいた堅太郎は、声をかけてきた瀧宮ルドルフの問いに頷いた。

ルドルフは、浅黒い肌と青い目、そして、笑顔がかわいいと世間では有名らしいが、堅太郎にしてみれば、階級違いでさえなければ、ライバルに当たる空手選手だ。

階級違いだというのに、ライバルなどという言葉を持ち出すのには理由がある。

大手健康食品メーカーである美悠好に所属する堅太郎は、美悠好のイメージ選手も務めている。

そして、ルドルフも所属する白馬警護のイメージ選手を務めているのだが、ルドルフは広報部にも所属しており、白馬警護が主宰するウェブラジオのパーソナリティーも務めているのだ。

空手選手としての練度はともかく、企業の広告塔としてはルドルフの方が如才なく勤めており、堅太郎にも、ルドルフを見習って、という要望が来ることも少なくない。

「ありがとうございます、太剛持選手。

友達から、ここの炙りマグロが美味しいと聞いて来たのですが、話通りの活気ですね」

「選手、は、つけなくていい。

今は、ただの客同士だ」

堅太郎は、ルドルフの言葉に首を振った。

居酒屋で、客以外の立場を持ち出すことが無粋だと感じたというのもある。

だが、堅太郎はルドルフに、「空手選手として」接したくなかったのだ。

階級が違うため、堅太郎とルドルフが空手選手として拳を交えることはできない。

となると、比較要素は「企業の広告塔」としての活躍になる。

堅太郎は、ルドルフのように如才なく話せない。

馴染みの店だというのに、炙りマグロが美味しいというのも初耳だった。

空手以外のこととなると不器用だという自覚がある堅太郎にとって、ルドルフは、非常にやりにくい相手なのだ。

「そうですね、失礼しました、太剛持さん」

ルドルフは、屈託のない笑みを堅太郎に向けている。  
笑みだけを見れば、人懐っこい大型犬を連想できるかもしれない。  
だが、椅子に座る動きや、筋肉のつき方は、空手選手としての気迫に満ちている。  
ルドルフが、炙りマグロを注文すると、古参の店員であるおばちゃんが「おやまあ、耳聡いのねえ」と感心した様子で笑った。  
本当に、炙りマグロが有名なのだ、と堅太郎はおばちゃんの様子を見て察した。  
なんとなく、面白くない、と堅太郎は感じた。

とはいえ、それは最初だけのことだった。  
ルドルフは、堅太郎がうんざりしない程度の会話しかしなかった。  
客同士、と堅太郎が最初に伝えたおかげか、好きなつまみの話を交わす程度で、堅太郎がルドルフに感じている「企業の広告塔としての能力差」を意識することはなかった。  
天性の才覚か、あるいは、人生経験に基づく観察力なのかは分からないが、ルドルフは、相手が好ましいと感じる距離を取るのが上手であった。  
だから、空手以外には不器用な堅太郎も、己が口下手だと感じずに、つまみの話を交わすことができた。  
悪い時間ではなかった。  
そのはずであった。

ほどほどに飲み、ほどほどに食べたのち、堅太郎とルドルフは会計のために立ち上がった。  
その拍子に、ルドルフの尻ポケットから定期入れが落ちたので、堅太郎はそれを拾った。  
中を見るつもりなどなかった。  
ただ開いた状態で落ちた定期入れを拾い上げたときに、目にしてしまっただけなのだ。

ルドルフが堅太郎のよく知る女性と笑顔でピースサインを取っている写真を。  
それも、堅太郎以外の男性と、そのような真似をするはずがない、女性だ！  
堅太郎が所属する美悠好の会長である瑞樹総一郎の紹介で見合いをし、婚約を内定した女性である大垣アンナが、ルドルフとツーショットをしているのだ。  
堅太郎には、冷たい顔しか見せず、笑いもしないアンナが、ルドルフと笑顔で！  
美悠好の会長である瑞樹総一郎からお預かりした、大切な女性が、どうしてルドルフとこんな浮ついた写真を！

「ありがとうございます、太剛持さん」  
ルドルフが人懐っこい笑みを浮かべて、堅太郎に礼を述べる。  
だが、堅太郎には、その笑みが、堅太郎への嘲笑に見えてしまう。  
「……この、女性は？」  
堅太郎は、問いかけながら、拳を握りしめる。  
返答次第では、堅太郎はルドルフへの対応を変えなければならない。  
「ああ、彼女ですか、大学の先輩で大垣アンナさんですよ」  
大学の先輩と後輩の関係ならば、そういうこともあるのだろうか……

堅太郎はルドルフの顔を見るが、ルドルフに悪びれた様子はない。

堅太郎としては、浮ついている写真にしか見えないのだが、世間一般としては普通の写真なのかもしれない。

堅太郎はそう考え、呼吸を整えようとする。

だが、落ち着こうとする堅太郎を、ルドルフの次の言葉が打ちのめした。

「アンナさん、古臭い価値観の親類に、勝手に男性を押しつけられて迷惑だって、愚痴を言っていますね。

まあ、ゼミの先輩後輩ってことで何度か話を聞いているうちに、付き合うことになりました」

「つ、つきあうって……」

堅太郎は動揺し、ルドルフの定期入れを強く握ってしまう。

堅太郎とアンナの婚約はまだ、正式に発表されてはいない。

美悠好の会長である瑞樹総一郎の意向に従い、良い日取りで行う手はずなのだ。

だから、ルドルフには責任はないのだ、理屈の上では！

だが！ だが！

「アンナさんも、お相手も、義理で会っているような状態ですからね。

お相手さん、二言目には、お預かりした、って言うのが気持ち悪い、と。

確かにそうですよね。

そんな言い方をされたら、アンナさんが、誰かの所有物みたいですよ。

そういう言い方をする以上、その親類との縁しか求めているのだろうって、アンナさん、断言していましたから」

ルドルフの言葉に、堅太郎は頭が真っ白になった。

堅太郎は、確かに、アンナに対して「瑞樹総一郎会長からお預かりした」という言葉を使ってきた。

それは、瑞樹総一郎会長の信頼に反した無礼な振る舞いはしない、という意味だったのだが、アンナはその言葉を、「大垣アンナは、瑞樹総一郎の持ち物でしかない」と理解をしたのだ。

いや、誤解なのだ。

そんなつもりは……

「そもそも、好きなら好きって言いますよね。

相手の好みとか、好きな食べ物とか、そういう些細だけど、共に暮らすうえでは大事なことも聞こうとしない時点で、愛情がないわけですよ」

ルドルフの追撃の言葉に、堅太郎は頭が真っ白になった。

気がつけば、堅太郎は大雨に降られながらとぼとぼと歩いていた。

「共に暮らすうえでは大事なことを聞こうともしない時点で、愛情がない」

ルドルフの口を通じたアンナの判決は、堅太郎の心を何度も打ちのめした。

堅太郎にとって、結婚とは、良縁でさえあればよかった。

だから、美悠好の会長である瑞樹総一郎からの紹介は、良縁だと思っていたし、アンナのことは悪からず思っていた。

だが、アンナは堅太郎の怠慢を見限った。

言われてみれば、その通りだ。

堅太郎は、瑞樹総一郎会長の意向に従ってただけで、アンナの気持ちを考えたこともなかった。

アンナも納得した上での婚約の内定だと勝手に思い込んでいたのだ。

とんだ大間抜けだ！

堅太郎は夜半の大雨に降られながら自嘲する。

気がつけば、堅太郎は自宅を大きく通り過ぎていた。

近くの電柱に記載された番地は、堅太郎の自宅から3ブロック先であることを示している。

大雨に降られながらふらふらと歩いていたせいで、堅太郎は頭が冷えてきたが、身体も冷えている。

番地で大体の位置は分かるが、行動圏外なので、どこにどんな店があるのか、堅太郎には分からない。

そんなことを考え、堅太郎は自宅方面に引き返ししながら、周囲を見回す。

少し前の角地にコインランドリーの看板があった。

コインランドリーで服を乾かしながら、雨宿りをした方がいいだろう。

そう考え、堅太郎は早足でコインランドリーに入る。

コインランドリーに入ると、ドラムを回す音が低く響いている。

ドラム式洗濯機の一つが回っているが、人の姿はない。

終わった頃合いに回収しに来るのだろうが、不用心だな、と堅太郎は考える。

とはいえ、それは他人事でしかない。

堅太郎は、正面の乾燥機を開け、雨に濡れた衣服を脱いでいく。

長い間大雨に濡れていたせいで、肌に張りつき、重苦しいが、堅太郎は両腕にぐっと力を入れ、血管を浮かせながら脱いでいく。

露わになった上半身は、心身ともに健全たる漢の生き様を彷彿とさせる、贅力に満ちた身体つきであった。

体毛は生えているが、毛深いというほどではなく、堅太郎の漢ぶりを彩っている。

堅太郎は続いて、スラックスを脱ぐ。

スラックスが下ろされたことで露わになった白ブリーフは大雨のせいで肌の色や、チン毛の色、堅太郎のチンポの色も透けて見えている。

堅太郎は、風呂に入る前のように白ブリーフも脱ぐ。

ぶるるん！

堅太郎のチンポは雨に濡れて冷えて縮こまっているはずなのに、人並み以上に大きい。

亀頭を覆っている包皮は、大雨に濡れて冷え込んだせいで皮冠の芽がでているが、普段は皮冠の芽が出るほど包皮が余ったりしない。

さすがに玉袋は縮こまっているが、金玉自体が大きいおかげで堂々とした子種製造工場の様子がよく分かる。

堅太郎は、脱ぎ捨てた衣服を、白ブリーフも含めてすべて乾燥機に投げ入れる。

乾燥機の中でがたっと硬い音がしたことで、堅太郎はスマートフォンや財布をスラックスの尻ポケットに入れていたことを思い出す。

「くそっ、しくじったな」

堅太郎は乾燥機の中に腕を伸ばし、濡れたスラックスから財布とスマートフォンを取り出そうとする。

前屈みになったおかげで、堅太郎の雄肉でみっちりとした尻が強調される。

大雨に濡れ、冷えた玉袋は股座に密着しているが、太々しい陰茎は太ももの間で揺れている。

そのまま、濡れたスラックスからスマートフォンと財布を取り出した堅太郎は、スマートフォンを指紋認証で開き、とりあえず動作していることに安心する。

それから、財布から小銭を取り出し投入し、乾燥機を起動する。

「へくしっ」

コインランドリーの入り口から吹き込んだ風の冷たさに堅太郎はくしゃみをする。

「ああ、閉めてないせいか」

堅太郎は、コインランドリーの戸を開けたままにしていたことを思い出し、戸を閉めるために歩きだす。

ぶるんぶるるん！

堅太郎の太々しい陰茎がそれに合わせて揺れる。

「なっ！」

堅太郎はぎょっとした。

堅太郎は、今更ながらに、全裸であることに気がついた。

「しまった！」

堅太郎は、己が風呂に入る前のつもりで、白ブリーフまで全部含めて乾燥機に入れてしまったことを思い出す。

ここは、コインランドリーであって、自宅ではないのに、なんという馬鹿な真似を！

堅太郎は、心の中で己の愚かさを罵倒する。

酒を飲んでいたせいか、それとも、アンナへの対応が間違っていた己への苛立ちが原因か。

どちらにしても、堅太郎は公共の場所で全裸になっている。

ぎゅううううううん！

「はうっ！」

堅太郎は、下腹部の強烈な疼きに間拔けな声を上げた。

堅太郎の下腹部では、堅太郎のチンポが猛烈な勢いで勃起し始めている。

早回しの動画のように、堅太郎の下腹部でチンポがフル勃起している。

平常時では完全に覆っている包皮が後退し、童貞ピンクの亀頭が半分ほど露わになっている。

「いや、なんでだよ……」

堅太郎は、猛烈に疼く下腹部や、触れてもいないのに勃起したチンポに驚く。

だってそうだろう。

こんなところで全裸になっていると誰かに通報されたら、堅太郎の空手選手生命は断たれてしまう。

美悠好から解雇されるに違いない。

だから、こんなところで全裸でいることは悪いことなのだ。

堅太郎を破滅させる愚行なのだ。

だが、堅太郎がこの状況に危機感を抱けば抱くほど、下腹部の疼きは激しさを増す。

それこそ、精通をしたときの衝撃に匹敵する疼きなのだ。

「はあ……はあ……はあ……」

堅太郎の呼吸が荒くなり、大雨に濡れた幽鬼じみた顔立ちがいやらしさに染まっていく。

こんな姿を見られたら、破滅してしまう！

堅太郎は確かに、現状を正しく理解している。

だというのに、堅太郎の足は、そのままコインランドリーの戸口へと進む。

大雨はまだ降り続いており、夜半ということもあり、人通りなどない。

夜半に、しかも、大雨が降っている中、でかける人は稀だろう。

だが、稀というのは、ありえない、という意味ではない。

「ああ、見られたら、破滅だよな」

堅太郎の言葉は、現状を正しく理解していることを示している。

だというのに、堅太郎はコインランドリーの戸口に近づいていく。

コインランドリー内なら、まだ、苦しい言い訳をする余地も残されているだろう。

だが、全裸でコインランドリーの外に出たのならば、釈明の余地なく、露出狂という変態だ。

堅太郎は、いやらしく吐息を漏らす。

そして、コインランドリーの戸口から、一步、外に踏み出した。

一糸まとわぬ全裸で！

チンポを勃起させた、卑猥な姿で！

道路に出て行ったのだ！

## 後日談 堅太郎、裸針盤として男を導く より抜粋

「はあ……はあ……はあ……」

遠くの空の色がうっすらと曙光に染まる早朝、堅太郎は近所のランニングコースを走っていた。

空手選手として鍛え抜いた逞しい肉体を躍動させ、軽く呼吸を弾ませながら、堅太郎は安



定したランニングフォームで駆けていた。

全裸で！

全裸でランニングをしている堅太郎は、チンポをだらしなく揺らすことはない。

早朝全裸ランニングに興奮し、ガチガチに勃起しているチンポが大きく揺れることはないのだ。

「たまらねえ……たまらねえ……」

堅太郎は、喘ぎながら走っている。

数週間前、堅太郎は、優れた雄にして雄々しき漢としての新たな境地に至った。

野外露出において堅太郎は、チンポへの刺激抜きに素晴らしい絶頂に至れるようになったのだ。

もちろん、客観的に説明をするのならば、野外露出への興奮だけで射精するようになっただけでしかなく、露出魔としての業が深まっただけだ。

けれど堅太郎にとって、服をまとうずに活動することは、野外露出ではない。

天地との調和と、その先の境地に至るべく、虚飾を排し、日々、研鑽に励んでいるだけなのだ。

ランニングをしながら堅太郎は、天運と地縁を全身で受け止めようと両手を広げる。

全身が海綿体のように快感で満たされ、堅太郎は恍惚の笑みを浮かべている。

太剛持堅太郎が優れた雄にして雄々しき漢であり、天運と地縁を繋ぐ要であるからこそ、全裸で屋外を走り回ろうとも、咎められることはない。

咎められることなく、野外露出に耽り続けた堅太郎は、偶然でしかないことに大いなる意志を見出し、選ばれし者としての全能感に溺れている。

堅太郎は、社会規範や常識を見失ったわけではない。

一般的に、全裸で屋外を徘徊する行為を「露出」と呼び、刑法上、猥褻物陳列罪となることを、堅太郎はきちんと認識している。

その上で、堅太郎は野外露出に耽っている。

優れた雄にして雄々しき漢であるからこそ、太剛持堅太郎は咎められることはない。

そして、堅太郎の野外露出が咎められたとしても、堅太郎の雄の自尊心が傷つくことはない。

美悠好のイメージ選手としての人気、空手選手としての実績など、太剛持堅太郎の社会的価値よりも、堅太郎のチンポの方が強く、雄々しく、偉大であることを実感できるだけだからだ。

野外露出に耽る堅太郎にとって、野外露出による絶頂は、己の人生と結びついており、魂の一部である。

かつて、太剛持堅太郎の社会的価値と野外露出を天秤にかけ、堅太郎は野外露出と縁を切ろうと足掻いたこともある。

けれど堅太郎は、野外露出と縁を切ることができなかった。

チンポをシコシコするだけのオナニーよりも、野外露出による絶頂の方が気持ちよく、堅太郎の雄としての存在意義を満足させる素晴らしい体験だからだ。

だからこそ、堅太郎は、今も全裸でランニングをしている。

「たまらねえ……たまらねえ……」

下腹部の疼きを強く感じながら、堅太郎は喘いでいる。

天運と地縁が己の身体と結びつき、魂を震わせるような特別な絶頂の予感に堅太郎は大きく身体を震わせた。

そして堅太郎は、周回コースから周回コース中央にある憩いの広場に進路を変えた。

紫陽花が左右に生える遊歩道の緩やかな坂を駆け上がりながら、堅太郎は憩いの広場を目指す。

憩いの広場は、よく手入れされた芝生に覆われ、東屋が立つ高台であり、空がよく見える。

そのため、空気が澄む冬場には星空観察の会場となる。

住民たちが憩う場であり、季節の行事と結びついている広場に向かって、堅太郎は全裸で走る。

堅太郎のチンポは我慢汁に塗れており、堅太郎の変態行為を明らかにしている。

堅太郎は、全裸勃起を見られる可能性について怖れることはない。

過去の数々の野外露出を越えてきた堅太郎にとって、身の破滅を間近で感じる野外露出でなければ意味がないのだ。

憩いの広場は整えられた芝生と東屋しかない。

つまり、人の気配を察しても咄嗟に姿を消すことは不可能である。

また、開けた場所で目撃されてしまえば、全裸勃起の変質者が有名な空手選手であり、大手健康食品メーカーである美悠好のイメージ選手である太剛持堅太郎であると露見してしまうのだ。

全裸勃起の変質者として警察官に取り押さえられる様子を、堅太郎は夢想する。

誰も彼もが、堅太郎の勃起チンポを危険物のように敵視し、取り押さえ、隠し、そして、勃起チンポを露わにしていた堅太郎は裁判で非難される。

「たまらねえ」

堅太郎は足を止め、大きく身震いをした。

破滅の夢に堅太郎の下腹部がギュンギュンと疼いている。

とある山にて、全裸勃起状態のまま、談笑している登山客の横を通り過ぎたときのことを、堅太郎は下腹部で反芻する。

あの時感じた破滅と、高揚感は、堅太郎にとって宝物という言葉でさえ追いつかない素晴らしい経験であった。

太剛持堅太郎は、英雄性を備えた、優れた雄にして雄々しき漢である。

だからこそ、凡俗がひるむような窮地に飛び込み、勝利の果実を手に入れなければならない。

いつか訪れる破滅のために……

堅太郎は腰に手を当て、喘ぎながら身震いをした。

そして、あの山……

社会人として、空手選手として堅太郎が破滅したとしても、チンポの価値は証明される。

憩いの広場の人の気配を確認もせず、堅太郎は最後の坂を全力疾走する。

どっちだ！ どっちだ！ さあ！ どうなる！

堅太郎の勃起チンポがビクビクと震える。

「くうううううううううううう！」

母なる大地から父なる天に向けて、気が立ち上るように、堅太郎のザーメンが尿道を駆けあがっていく。

どっぴゅうううううううううるるるるるるるるるる！

住民たちのために手入れされている芝生の上に、堅太郎の変態ザーメンがまき散らされた。

素晴らしい絶頂と、素晴らしい絶頂を享受できる身体、そして、堅太郎をそのように生み、育んでくれた天地への感謝を、堅太郎は叫んだ。

「ふう……」

「今日も、最高の絶頂だった……」

堅太郎はふと、この英雄的行為である野外露出に開眼した切っ掛けを思い出した。

堅太郎は、滝宮ルドルフが昔の婚約者であった大垣アンナと交際をしていたことを久しぶりに思い出した。

大垣アンナへの感情的なしこりは、堅太郎の中には残っていない。

それに、今の堅太郎にとって、性的快楽とは、英雄的行為としての野外露出のみだ。

「堅太郎さん……」

誰かの声が、堅太郎の耳に届いた。

## 奥付

### サンプル版 『編集版 堅貞 爆ぜる』

初出一覧

第1話：2024年12月05日

後日談：2026年04月30日

作者：金目

### 金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに 金目堂サークルページ】

[https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker\\_id/RG01002299.html](https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker_id/RG01002299.html)

【Ci-en 金目堂】

<https://ci-en.dlsite.com/creator/34371>

【金目堂活動報告】 個人ブログ

<https://kinmedo-diary.sblo.jp/>

支援サイトを利用されていない方向けの案内と不定期の雑記に用いています。

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

[https://twitter.com/chigaya\\_deep](https://twitter.com/chigaya_deep)

同人誌や支援サイトの更新告知に用いています。